

東京都函館市叙景

タマジュハ函館短編集

タカペ二文庫

登場人物

・小鳥遊クロエ 自分を東京都民だと言い張る。本名 薩摩川タマ。

・ユン・ジュハ 本場韓国から送られてきた本格スロウアイドル。クロエを慕う。

・函館市 かつては砂嘴でできた小さな港町。今は亀田半島を制する観光都市。
著しい過疎化が進んでいる。東京都である。

・弁天町 小鳥遊クロエが棲まうアパートの住所。1ス。ロフト。
最寄り駅は函館市電「函館どっぐ前」徒歩5分。近隣にコンビニあり。

序文 山岡家情景より

「アノ…薩摩川サン」

カタコトめいているが漢字のイントネーションが完璧だ。どう考えてもこいつ日本人だろ

「本名で呼ぶな！」

「スイムセン」

「お前本当にガチで踊れないんだな」

聞けば、23歳らしい。最年長じゃん。だけど「お前」で行く。なんせ目の前にいるのは研修生だ。

ナメられたら終わり。けどどこか好感が持てる後輩だ。

「ハイ、オドレマセン」

正直だここで虚勢を張る等キャラを演じるのがアイドルたるものだが、この女にはその微塵さもない。ガチなやつだ

「好きだよ。お前のそいいうガチなところ好き」

「アリガト、ゴザイマス」

「褒めてねえよ！踊れないのにネガハピのオーディション受けてるのおかしいだろ！？」

「スイマセン、ニホンキタラオカネモラエル、ウリナラシゴトナイ」

ますます正直だ、好きだ。マジな感じがマジでいい

「アイドルが切実な事情出すのよくないと思うんだけど」

「ダメ？」

「いや、それがお前の個性だよ。好き、マジですき」

「アリガト、ゴザイマス」

「気に入った、金ないんだろ？ご飯食べにいこうよ、ラーメンだけど」

「日式ラーメン、スキデス。ウレシイ」

「なんだよ日式ラーメンって」突っ込む

「カンコクのラーメン全部インスタント麺。ニッポンのラーメンはなまのメンスキ」

カタコトめいているが流暢な日本語で語るこの女マジでいい感じじゃん。

自分が一応イギリス人だったってことを忘れさせてくれる

「고양이를 입는 것은 좋지 않습니다. (ネコを被るのはよくない)」

「今なんつった？」

「スイマセン…ナンデモナイ」

ハングルはわからないが意味はわかる。そういう感覚がこの女からは感じる

お互い、エセ外人アイドルとして頑張っていこう。そう誓うのだった。

クズと呼ぶには世紀末すぎるアイドルが二人。テーブル席で並んで食べる山岡家のトンコツは

臭い。

いい感じだ

※ラーメン山岡家 函館万代店 函館市万代町

あじさい叙景

「薩摩川サン、アリガトゴザイマス」

「本名で呼ぶな！」

「スイムセン」

いつもの会話が響くのは函館ラーメンの名店「あじさい」。塩ラーメンといえば「あじさい」だ。東京にいけば何処にでもあるチェーン店だ。後輩に飯を奢るのも仕事の内だ。

「なんで本名なんだよ…」

カウンターの水を一口飲む。まだこの女と会話する時に軽く緊張する。セナの通訳なしで会話できるようにって、まだ日は浅い。

「ハジメテ、アタトキ。『クロエサン』芸名デヨンダ。ソレガ薩摩川サン怒らせた、タマサンオコッタ原因ダトオモタ」

「だから薩摩川って呼ぶなって」

「スイマセン」

「まあ：タマでいいよ。というかクロエでもいいし」

「クロエさん芸名、タマさん本名。本名ノハウガイイ！」

こいつ：とんでもない爆弾をぶつけて気がやった。小鳥遊クロエは薩摩川タマと同一の存在であるという虚偽はネガハピの楽屋の中でしか通用しない嘘なのだ

まあ：バレる事ないだろ。

「クロエでいいよ、クロエにしてくれ」

予防線は張っておく、嘘に嘘を塗り固める人生でも、保険は絶対必要だからな。

「ワカリマシタ、クロエサン：」

「オ：おう、よろしく：」

たどたどしい会話がなんかいい感じた、嘘さえ共有できれば苦手ではなくなった。嘘がバレたらもう嘘で塗り固める事はできない。

偽りのない裸でこの韓国女と付き合っていくしかない。凡愚や宮近にもない何故か友情めいた関係が産まれていた：なんでだ！？私しらねえ！？

「おまたせしましたー!」

熱々の鉢が二つ届く

「遠慮せず食べろよ」

「タタダキマス」

黒髪セミロングをヘアゴムでさっさとお団子にしてしまう。この女、麺類に相当慣れている

「オイシイ! 塩の味のオサカナのダシ」

歓喜の声を見せる彼女を横にいつもの塩ラーメンを啜る。麺は半分にしてもらう。あじさいはさっぱり系だがラーメンは単純に太るからな

「日式ラーメン、オイシイ。ヤサシイアジ、シヨパクナイシカラクモナイ。イイカンジ!」

そう、東京にいれば「あじさい」なんてどこでも食べられるんだ。ラッキープイエロと一緒、カリフォルニアベイビーだってある。

「日本にいればラーメンなんて何時でもどこでも食べられるよ」

「ワカリマシタ、クロエサン。ワタシニホンで頑張ル」

決意の言葉を聞く。

「嗚呼、頑張れよダンス頑張れよあと唄も」

「ソレハメドクサイ」

好きだ、この感じがダイスキだ。天然のオモロ。とんでもない掘り出し物を見つけてきてしまった。

この謎の女との会話は、拙いが。どこか新鮮でたのしい

「怯懦」二文字すら感じさせない。なおかつ無謀で虚偽でなおかつ杜撰だわたしも虚偽に塗（まみ）れている。

虚偽と虚偽同士。まとめて括ればまた楽しいのだろう

この後輩に奢るのも、仕事の内だと思った。

プライベートじゃない。絶対にプライベートじゃない。これは仕事だ

だかこの仕事めっちゃオモロだ。

※函館麵厨房 「あじさい」 本店 函館市五稜郭町。

ラッキーパーピエロ叙景

「アノ…薩摩川サン」

「本名で呼ぶな！」

「スイムセン」

いつもの挨拶から始まる。この流暢な日本語ではまだ足りないらしい。というか英語堪能ってどうなってんだコイツ。

「…タツ…タマさん」

「いつから下の名前で呼び合うような仲になったよ？」

「スイマセン」 萎縮しているようだが、美麗な顔はまったく歪まない彼女…キライになれない。

初対面の時は萎縮してしまった、英語話せる理由ないだろ。まあわたしはイギリス人である事には違いないけど

イギリス人だってずっと日本にいたら、英語なんて喋れるわけないだろ。それと同じだ。そういう芸人いたろ黒人の寿司職人の倅。あれと同じだ。

けど、今はなんかこんな仲になってしまった。かわいい後輩だ。表裏がない、いい感じだ。

「タカナシ、小鳥遊でいいよ」

「ソレ芸名、芸名ハ、仕事ト楽屋ノ外デ呼ンジャダメ」

「小鳥遊！！」

「ワカリマシタ」

裏で芸名を使うなと躰けられてる辺り、世渡りだけは上手なようだこの女。

「あのな、これからは英語禁止な」

「ナンデー！？」

「英会話したら日本語上手にならないだろ…日本語の絶妙な部分スタディ…勉強しないとイケないじゃん」

「アツ、ナルホド」

嘘から出た錆の言い訳にしたら上等だと思う。

「クロエさんホントニホンゴ上手、日本人ミタイ」

——まあ生まれも育ちも日本ですから？

「ニホンゴのコツ、オシエテホシイ」嘆願だった。

「まあそれ位なら教えるよ。けど英語禁止な、他言語使ったらニュアンス伝わらないからな」

「ワカリマシタ…トコロデ」

「なんだよ」

「クロエさん、ニホンゴドコでナラタ？」

困る質問してんじゃねえ！

「の…NOVAかな」

適当に答えた、眼の前の韓国女は納得してる。退路はないバレたらもうオシマイだ。

東京になら何処にでもあるハンバーガーチェーン「ラッキープイエロ」で喫食。

ワタシは名物ラッキーガラナだけ飲む。スタイル維持きちいんだよ。気安くハンバーガー食べれない。眼の前の女はチャイニーズチキンバーガーをもりもり食べている。

「オイシ、オイシ、カンコクの子キンニ勝テル。出店スル」

「韓国はチキン大国だし：あとラッピ東京の外にしかないローカルチェーンなんだよ、ラッピはね」

「ソウナンデスカ、残念」

当然奢りだ。後輩だからな、なんか金持ってなさそうだし。住む所も危ういというか住民票持っていないらしい！

「今日はワタシが出すから」「アリガトゴザイマス」恩着せかましい台詞だ

「かわいがってやってるんだからこの質問にはちゃんと答えろよ」

「ナンデスカ？」

「ジュハはクロエの推しなんだよな？」

「それは、ソウイウケデモナイ」

——最高だこの女。敬遠していたのがバカみたいだ。この女の裏表のなさ、本当に好きだ。凡愚の中でも一つ飛び抜けてやがる。しばらく、こいつに飯を奢る事になりそうだ。

※ラッキーピエロ ベイエリア店

函館美鈴情景

「薩摩川サン、ゴチソサマデス」

「本名で呼ぶな！」

「スィムセン、クロエサン」

いつもの会話が響くのは東京にならドコにでもある喫茶店「函館美鈴」本店の年季の入った木製椅子席。

都会に行けば函館美鈴なんて何処にでもあるんだよ。空港にだってあるし：嘘じゃない。

港町函館といえはビルジングめいた旧建築物を再利用した古民家カフェが流行りだが茶をしばらくなら函館美鈴でいい。

眼の前のジュハは映（バ）える「コーヒーフロート」を注文。まあ観光客はまずそこだよな自分はカロリーが気になるのでアイスティーで茶を濁す。体型維持を考えたら気軽にソフトクリームに手を出せない

SNSに投稿するのかパシャパシャ写真を撮っている。本店だったら店の前の古き善きの焙煎機

を撮れよ…

ジュハの様子がおかしい…品物は取るが、自撮りする様子がまったくない。それどころか眼の前に広がる函館名物をSNSに投稿する仕草がない。写真を撮ったら満足したのか、モクモクと喫食している。

「SNS強化するって宮近言ってたけど。お前はやらないの?」

「ワタシSNSシナイ。投稿シナイ。ミルダケ」

突拍子もない返事が帰ってきた。

「SNSは小泉さんガンバテくれてる。自分シナイ」

卑怯だ…毎日SNSを通じて醜愚を見下ろしている自分がむなしくなってきた。

「そんなの卑怯じゃん」

「韓国イタコロ、アイドルヤテナイノ、バレル。ダカラオマカセ」

「たしかにい…」

「SNSキケン。ミモトバレタラオワリ」

SNSを掘れば過去なんていくらでも発掘できる。こいつは日本以上にSNSに厳しい韓国育ちだ。

こいつ、ありあまる「美貌」と「生存戦略」だけは一丁前に揃えてやがる。なんて奴だ
どんな美貌を持っても。人類は杜撰さだけでは生きていけない。なにか「一芸」に秀でてい
ないと「偶像」としてはパンチが弱い

ワタシはこの女の狡猾とも呼べる「生存戦略性」にちょっと惚れているかもしれない
まあレッスンのコーヒー代出してやる程度には気に入っている。

プライベートじゃない。これは仕事だ、後輩に奢るのも仕事だ

プライベートじゃない。プライベートを消費するのはオモロじゃない。愚かだ。

「しっかりしてるなあ…以外じゃん」

「ニホンでオカネ稼グのカンタン（簡単）ジャナイ。アタマ使ウ。ニホンゴ習うのカナリベンキ
ヨした」

「偉いじゃん…」

「ワタシエライ。ダカラ今、ニホンニイル」

なかなか誇らしげだ。面白い。どっからそんな自信が溢れてくるのか分からない。

美貌からじゃない。狡猾さからでもない、この女のの芯にある「凶太さ」が自信に繋がっているのだと思う

「じゃあ唄もダンスも頑張らないとな」

「ソレハメドクサイ」

——最高だッ！こいつは最高だッ！とんでもねえオモロだッ！

「ダンスはいいよ、筋トレ頑張ったら今度カルフォルニアベイビー連れてってやる」

「ワカリマシタ、チョト頑張ル」

「飯の為には動けるのかよ！？」

「人間、食ベナイトシヌ」

真理をつく杜撰な女に今日も飯を奢る。楽しい毎日だ。

※函館美鈴大門店 函館市松風町

ベイエリア情景

「あの…タマさん」

「いつから下の名前で呼ぶような間柄になったよ!？」

「スイマセン」

いつもの会話が響くのは東京にならドコにでもある地産地消ローカルハンバーガーチェーン「ラッキーパーピエロ」ベイエリア店

観光客しかいないがベイエリア店なぜなら広いからだ

都会に行けばラッキーパーピエロなんて何処にでもあるんだよ。森町にも七飯町にだってあるし…
嘘じゃない。

「イタダキマス」「オウ、しっかり食えよ」

眼の前の女はハンバーガーにかぶりついている、私はいつものラッキーパーピエロで体型維持。

最近は函館名物であるチャイニーズバーガーに食べ飽きたようでラッキーパーピエロバーガーに手を出している。別に名物じゃない。目玉焼きが挟んであるハンバーガー。マックで言う「月見

バーガー」だ、ピンクのジャージの令嬢がちらつく

「おまえ、やってるらしいな」

「ヤテルってナニ？」

「宮近から聞いたぞ——」

彼女の丹田は私服でも晒されていた。見せつけるように。臍を晒すストリート体型。その腹筋はスリムで無駄が一切なく、軽く筋が見えていた。やってる。こいつ絶対やってる。

某月仏滅。ジェネリック達のレッスンが終わる、楽屋めいた化粧前がズラッと並ぶ休憩室。凡愚達戻る。

「クロエさん聞いてくださいよ」

「なんだよ宮近」

「最近ジュハさんヤバいんですよ」

「要件だけまとめろ」アヤセまできた

「最近全然ダイス教えてくれないんですよジュハさん」

ついに指導までサボりはじめた。杜撰な虚偽は許すが。怠惰は許さん。

「じゃあ何やってるのジユハ？踊ってるのか？」

「踊りません。ヨガマット敷いてヨガ一時間くらいやって、その後レッスン時間終わるまで一生足上げ腹筋しています」

尋常じゃない。

「ダンスにおいて体幹トレーニングが重要だって意味なんじゃないか？唄も腹筋使うし、ワタシも軽くやってるし」

「本当ですかあ？」凡愚まできた。

「ああ、お前らも身体絞れよ。愚かな男ファンはわからないけど、女はデブった事に関しては敏感だからな」

凡愚共に釘をさしておいた。

「宮近、ジユハは？」

「シャワー浴びてます」

そうか、とだけ答えた。

「アイツ鍛えてるな」「ああやってる」

「おまえは…鍛えてるのか？」アヤセがつっこんできた

「多少はやるよ。体型維持きちんだよ」

顔だけいい女から体型の墮落が見えたら終わりだ、ジャージの上から贅肉が乗ってたらヤバイだろ、アイドルとして。

衣装屋さんに「もう少しウエストゆるい感じでお願いします」って泣きつく自分なんか想像したくない。

「ワタシと一緒に一日一食でローカロリーに生きろ。ナマケモノさんを見習え」

「それは無理だね、三食食わないと人間死ぬんだよ」

そうだ、三食食わないと人間死ぬ。

——私は毎日のようにアイツに飯を奢っている

なのに…ジュハの体型に支障が出ないのは何故だ？それが疑問だったえ

今日、答えが分かった。とてもシンプルな答えだった

「鍛えるのは女々しいんだぞ。レッスン中に筋トレするなよ」

「体幹ダイジ、ボディメンテナンス重要。クロエさんも知テルハズ」

「わかってるけど露骨にやるな。隠れてやるもんなだよ」

「クロエさんとゴハンする機会、増えタネ。カロリー消費シナイトスタイル維持デキナイネ」

すっかり気をつけてやがる。ラッキーガラナでしのいでいる自分と800kcalのバーガーを嚥下している眼の前の異国の女。前者は節制するのみ、しかし後者は努力している。

わたしだって異国の女だ、ダテにカタコトで喋っていない。自覚しなければ。

「まあ増えたけど…気にしてたのか」「アタリマエ」

「スタイルよくないとアイドルすぐ陥落スルネ。日本入レナクナル。それはすごいコマル」

こいつ日本で稼ぐ事に関しては、本当に意地というか執念すら感じる。

「私の自慢のアブラックス（腹筋の縦筋）、ダイジにスル。タカラモノね」

「そうだな、臍周りはアイドルの宝だからな。」

皮下脂肪は一切ないが、ちよつと鍛えないといけないなと思った。

日々の腹筋100回∞セットじゃ足りない。

マナカちゃんはプランクだけって言うんだけど、マナカちゃんも絶対やってる。

「クロエさんも一緒に筋トレスル、ゴハンシカリ食べる。イイネ」

「私はしてるしいゝけど」

「クロエさんと、仲良くお食事シタイね。私ばかり食べる。不公平ね」

そう言われたらそうだな。同じ顔とカラダがいい女同士、同じ土俵に立たないと不公平だよな。

「クロエさんもシカリ食べて、シカリ動く。ダイジ」

「そうだな、今度から一緒に食うよ。今日はおまえそれ一個くれよ」

マグカップに入ったチーズポテト。「ラキポテ」と一本もらう。

「一緒にゴハン、ウレシイネ」

「ああ、おまえといると退屈しないよ、オモロだ」

「ワタシもタイクツしない。イイネ」彼女が締めくくる。

「それはそうとしてちゃんと踊って謳うんだろうな？」

「ソレハメドクサイ」

——これだ！この怠惰に私は惚れ込んでる。スタイルは意地すがアイドル活動にはまったく興味が無いその根性が好きでたまらない

「踊りはいいけど、撮るんだから唄はやれよ」

「ニホンいばいゴベンキョスル」

「カラオケいけよ上手くなるぞ」「クロエサンと今度イショにイキタイ」

「一人でいけよ」「韓国の身分証シカナイ。身分証ハ国際運転免許ダケ。カイインなれないね」
切実な事情をチラ見せる女に今日も情（なさけ）をかける

この生活、ちょっとオモロで気に入っている。

後輩に奢るのはプライベートではない。仕事であり。オモロなのだ。

東京都函館市の夜は更けていく。レンガ造りの運河とライトアップされたクルーザーの光が胸にささる。

※ラッキーパーティエロ末広マリーナ店 金森赤レンガ倉庫群そば

元町と恋バナ情景

「アノ？クロエさん？」

「いつから芸名で呼ぶ間柄になったよ！？」

「スイマセン」

普段と違い、わたしが一方的に喋っている。黄色い会話が響くのは東京だと此処しかない異国情緒溢れたドイツハム・ソーセージ専門店「レイモンハウス」

大正まで遡る100年近い歴史をもつ本場ドイツ人が創業した東京名物ソーセージ専門店だ。こんな所観光客しかいかないと思うが、日本のすべてがめずらしいこの女とイートインでレイモンドッグを注文

顔が抜群にいい外で女がソーセージ貪りつく姿が見せられないからな、二階は創業者カールレイモン氏の記念館になっている

男性器めいたものに齧り付きながら語る話題はプロデューサーのお涙頂戴失恋エピソード
「……ってことがあったんだよ」

マネージャーとメンヘラ彼女によるのしょうもない愁嘆場。あの男の嗚咽はまだ鮮明に覚えている。

「ヒトのレンアイ、バカニするのヨクナイ」

正論言うじゃん。

「へー、いっちゃ前に『恋愛』なんて言葉知ってるのえらいな」

「にほんごはイギリス人のタマさんより自信アル」

「言ってくれるじゃん」

ジュハはパクパクと食べ終えて、ウーロン茶を飲んでいる。

「ジュウレンアイだって小泉さんから聞いたね」

「そうだけど？」

「わたし、ニホンいるあいだはレンアイはダメいわれたね」

「そりゃあ、国際問題だし？大使館とか行きたくないでしょ」

「就労ビザほしいね、強制送還イヤデス」

「じゃあ色恋沙汰は無視してばっちり働かないとな、

「レンアイうらやましい」

「どういふこと？」

「カンコク、ガクセイがイロコイザタするのキビしい。みんな高校出るまでベンキョ。レンアイしてるの諦めてるアタマワルと韓国ドラマだけ」

「いうじゃん、バカじゃなかったんだな」

「ベンキョガンバタ。ニホンゴもナラタ。けどカンコクの JapaneseSalary...oh,No」

「英語禁止」「ゴメナサイ」ジュハペコリと頭を垂れる

「サラリーマンは和製英語だからな、日本語達者なのバレるぞ」

「知りませんデシタ、」

韓国女子の切実な事情がうかがえる

「だから、マネージャさん。レンアイできるのウラヤマシイ。カコクみんなイソガシ。レンアイドラマだけね」

「切実じゃーん」「切実。ある意味シャカイ問題」

「へえ：じゃあ彼氏彼女とか男女恋愛するはウラヤマシイか？」

「それはソデモない」

即答しやがったッ！——さっきまでの話はなんだったんだ？表裏がコンマ0.5で豹変するこの女、嫌いにならない

「わたしカセギにきた。うらやましいけどレンアイいらないネ。男性事情バレて堕ちるアイドルはカンコクに腐ルホドイル」

「そうだ、ネガハピであり続ける為には恋愛よりアイドル優先な」

緑のジャージがアタマにちらつく。マナカちゃんに恋愛感情はない、ある訳がない。男にクツキーを送るのは母性愛なだけだ

「ワカテル。クロエさん以上にワカテル。これからもクロエさんゴハンおごてモラエルようガンバル」

「じゃあ唄と踊りもがんばれ——」

「それはメドクサイ」

即答だった。オモロだ。

「いいよ、うちの紫色は歌っても踊ってもいけないし：なんとかなる」

「ナトカナル」

「実際私たち踊ってないからな、体型維持だけしような」

「筋トレ、ガバルネ。ソセージョイシイ。またきたいね」

「ああ、今度はカルフォルニアベイビーのシスコライスな」

「やたね！ぜったいいきたかた。シスコライスたべたいね」

この与太話自体はオモロではないが、眼の前の女はオモロだ。楽しい

対面で女と女で恋愛語りなんてする機会はありませんだろうから彼女に奢り続けるだろう教会と寺が密集する元町の坂は急勾配だが、まったく苦にならない喫茶であった。

※レイモンハウス元町店 北海道函北市元町

函館駅、エキナカ叙景

「あのさあ…ジュハ？」

「なんですかタマさん？」

「いつから名前で呼ぶ間柄になったよ！？…本名で呼ぶな！」

「スイマセン、クロエさん」「それでいい」

いつも会話が響くのは東京にならどこにでもあるハンバーガーチェーン「ラッキープエロ」の前
函館駅前店でジュハはチャイニーズキン弁当を購入する。わたしはお持ち帰りのカレーを購入
ラッピのカレーは普遍なのがいい、家庭の味がするからいいんだ。

バーガーでいいだろ…なんで変わり種食べてんだよ。わたしは

「ジュハさあ…ジュエネハピっていくら貰ってるの？」

「イクラッテナニ？オサカナノハナシシテナイ」

「ギャラだよギャラ！給料！」

「キュウリヨウ…コイズミサンカラ、オ小遣いモラテル」

「小遣い？」

「オウチナイ、住所登録まだ、就労ビザ発行中。タイヘン、」

「ビザないと強制帰国か…切実だな」

「モモサン以外わたしとヒカリさん、今は寮に住んでる。小遣いは ∞ 万円」

∞ 食ついて ∞ 万の小遣い…破格の優遇じゃん。

「 ∞ 万！？ 私たちより多いじゃん！」

「駆け出しの頃、月 ∞ 万だったよ」

「ドングリの背比べ。違イナイ、今クロエさんお金もち、イイネ」

まあ親の仕送りが月 ∞ 万あって、弁天町のワンルームアパートが月 ∞ 万円で光熱費諸々かんがえたら余裕だ。

モデルの仕事も入っている。 ∞ 割ほど事務所に抜かれるがモデルの仕事だけで月でならすと ∞ 万円近く稼いでいる

∞ 歳でこれだけ稼いでいるのはわたしと同じアイドル業が怪しいコンカフェか風俗嬢かマナカチ

やんくらいだろう

マナカちゃんはやってる。やってる側の女の子だが絶対男なんか股を開かない。

そうだと信じている。

函館駅構内のタリーズで一服。ジュハが土産コーナーで実演販売しているデキたてのイカ煎餅がタベタイとごねていたが

「そのイカせんべいおまえのウエストよりでかいんだぞ」と説明すると諦める

あの店のいか煎餅はデカイ、舐めてかかって後悔するに決まっている。しかも賞味期限は10分。冷めたらしなしなの小麦粉の固まりになるからな

アイドル業意外のギャラの話を経くする。セナとハナコは俳優業やってるし、わたしはアパレルだがモデルやってる、モデルは単価は安いが俳優業と違い時間の拘束がないので複数こなせる事
「おまえはスタイルグンバツなんだからモデルやれよ」

「ワタシみたいな女^{オンナ}国イパイいる」

「日本にはいねえんだよ。おまえのほっそいウエスト(43cm)維持するのに苦勞しているんだよ日本人は」

「鍛えればいいね。腹筋大事ね」

「ところでさ、宮近はなんで寮にいなんだ？」

「宮近……一人暮らしできる。住所のないヒカリさんとワタシだけ」

「ジュハはまだ住所ないんだからしょうがないじゃん。糸井がなんで寮なんだよ？」

「ナイシヨね、クロエさんだから話すね、あの人ホゴ観察中。誰か見張ってないとダメね」

「やべー……凡愚やべー……」

「武勇伝いっぱい語るね、スゴイねヒカリさん。韓国ならまだ服役してるね、日本の少年法優しいね」

凡愚の凡愚らしくない所が見えてしまった

「スジモンなのあいつ？」

「イッショニ寮のお風呂入ったけどTATTOOなかな、ワルイ人みんなfamilyの絆の為にTATTOO彫る、ドコも同じね」

「そうか……紋々がないなら今度一緒に風呂でも行くか？」

「行きたいね！」

「女同士の温泉は美顔バトルだ。スッピンでも美人である事が条件だからな。糸井の顔はどうなんだろう…メイクは宮近くらいゴツイが…」

「ヒカリさんもモモさんも顔は普通ネ、可愛くもないしブサイクでもない」

「言うじゃん、ジュハ…おまえはカワイイ方なのか？自分基準でいいぞ」

「わたしカワイクてスタイルいいね！整形しないでこの顔ね。だからニホンで稼ぐね！」
わかってきたじゃねえかこのオモロ。己の美しさに酔いだしてきてからアイドルだ

「ニホンでイバイ稼ぐ、いつかクロエさんにオイシイ物ゴチソするね」

「楽しみに待ってるわ…まだ早いけどな、唄と踊り覚えような」

「それはメドクサイ。歌わず踊らず稼ぐ。クロエさんに函館朝市オゴルね、イカソメンタベルネ」

そうだな、函館に来たならイカソメンだな…観光客値段だが食べる勝ちはある。

二人で朝市のどんぶり横丁に行く日も近いかも知れない。

凡愚の武勇伝がどんなものなのか、ちょっと楽しみた。

「マネージャーに今夜は遅くなるって連絡入れてやる。今日はワタシの家で飯食うぞ」

「いいの?!」

「弁当冷めちまうだろ。チンして二人で食べような」

「ウレシ、ウレシイね」

アイドル業というか同性を家に招き入れるのは始めてだ。そんな気持ちにさせてくれるこの女、本当にオモロだ。誰にも渡さない。

※函館銘菓「いかせんべい」函館本線「函館駅」構内おみあげコーナー等で販売。

きみのとりはうたえる。カラオケ叙景

「ボクのミギテをシリマセンカ？」

「知らないよ」

「ユクエフメイニナリマシタ♪」

眼の前の韓国女が外人にしては流暢だが、ヘタクソな日本語で歌っているのは東京にならどこにでもある「カラオケ館」だ。

市街地から昭和まで出てくるのも大変だつていうのに：まあアイドルは「まね○ねこ」には行けない。

ケチくさい激安カラオケで歌っていたら様にならないからな

しかしまあ目の前の女は歌う唄う。

「カラオケ：すきなのか？」

「外国じんみんなカラオケスキ」

知らなかった：日本だけの文化だと思っていたカラオケ。「カラオケ」がそもそも日本語だから

らな

「ドリンクタノムネ」ジュハ

「そうだな、ドリンク込み料金だからな」

「レイコー（冷）の冷茶二つでイイネ？」

レイコーなんてマニアックな言葉を覚えてやがる…それ関西でしか通じねえよ。ちよつとオモ口だからいいが

「烏龍茶は喉に悪いぞ」

「そうですか…シラナカタね」

カラオケ豆知識を一つ伝授

「ダイエットコーラにしろよ」

「アマタルイのキライ、diet coke ノドに残ルイヤネ」

「じゃあ水かアイスティーにしな」

「freedrinkで Water 飲む人イナイ。アイスティーするネ」

このカラオケ、ジュースは厳禁にしている。なぜなら飲み放題カラオケにいくと砂糖の固まり

をがぶ飲みする事になるからだ

健康に悪い、二十歳そこそこの女子であっても臍臓に敬意を示さないと

そして、不必要な内臓脂肪とは決別しなければ

——なんて後輩とカラオケに？ついに先輩風吹かせたじめたかと思われているが。

ジュハには切実な事情があった。

「カイイン証助カル、アリガトゴザイマス」

この女ユンジュハは会員証を作る証明書が存在しない。国際免許証しか持っていないからだ。病院にも行けなければ、残留証すらない。就労ビザもまだなこの女がカラオケに行く手段は誰かに誘ってもらうしかない、当然身分証のある日本人だ。

宮近か糸井に誘ってもらえばいいが、この女はオモロだ、凡愚に渡すわけにはいかない

……というか、糸井とカラオケいったら絶対反社とお付き合いだろ。あの凡愚においての先輩は兄弟盃の兄にあたる。先輩の為なら女子の細躯で二郎を腹に納めなければならぬらしい。

「差し入れ」と称してマックのハンバーガーを100個ほど強制的に食わされた事があるらしい

……ウシジマくんかよ。完食したらしい。アイドルじゃなくて大食いタレントになれよ糸井。

「ああ、いきなり新曲歌えていわれるかもしれないからな、唄練習しないとな」

自分たちもいきなりニコシングルの打診もいきなりだった。

「作曲家さんに呼ばれる？」

「可能性はある、歌えよ」

「カラオケ：サキヨクさんいやらしい事しない？」

「しないよ！なんで風俗としてのカラオケ知ってんだよ」

「カンコクと性風俗のカラオケ、密接ね、アイドルになれないあたまわるいビジンみんなカラオケで仕事してるね」

「マッサージ店だと思ってた」

「そっちはあたまワルないけてないカオがいくね」

ジュハからカンコクの性知識を一つ植え付けられた

「日本のカラオケはそういう文化ないから、カラオケルームでやりはじめたら監視カメラでわか

るしな」

「ウレシイネ、ウタウね」

次の曲がかかる。

平成10年代産まれの人間には古めかしいどころか知らないまであるイントロが流れる。

「ドブネズミミタイニ、ウツクシクナリタイ写真にはウツラナイ、ウツクシサがアルカラ」

リンダリンダ、リンダリンダリンダ。熱唱だった。

「ドブネズミ、ミタイニ、ナニヨリモヤサシク。ドブネズミみたいに。ダレヨリモアタタカク」

なんだかつたない日本語で歌われると甲本ヒロトの曲が染みるなあ……なんかそんな映画あったぞ！？

「ブルハーツ、カンコク人気」ジュハが説明する

「アイドルなんだからアイドルの唄歌えよ」

「ソレハ、メドクサイ。カラオケは日頃のウプンはらす場所」

オモロだ。なんで令和∞年ブルーハーツ？そういう所がおもしろだ

「ジュハさんもブルハーツ唄うね」

「知らねえよ世代じゃないし……まあ私くらいの含蓄がある女なら歌えるのだが？」

「聞きたいキキタイ」

液晶端末をポチポチいじる

「——100年ぶりの世紀末ッ！」

世代じゃない。まだ産まれてすらないころの曲。

ジュハは知っていた。名探偵なコ○ンはカンコクでも流行っているらしい。

しかしこの女オモロだ、最近はおモロじゃなくて話しているだけで楽しくなってきた

自分の立ち位置が不安になってきた……大丈夫か？大丈夫なのか私？

まあこの女がいったしに就労ビザを取得するまで面倒みてあげないとなという情けを覚えている
それくらい、オモロな女だ

寂れる繁華街と相反して栄える函館市昭和には雪は消えた。春は近い。

※カラオケ館 「函館五稜郭店」 北海道函館市本町

セイコーマート叙景

「クロエさん」

「なんだよ」

ごく普通のやりとりが行われているのは東京にならドコにでもあるコンビニチェーンセイコーマート松風町店

ハセガワストアでいいだろう？と思う人もいるかもしれないけど、ハセストは大きい街道沿いにある

徒歩圏内でいける場所といえればイエリアに位にしかない、実はハセストは不便なのだ

その代わり焼き鳥は焼いてくれるし焼き立てパンだつてあるハセストは最高だ。

だが今日はセイコーマートで話ははじまる。ジュハはホットシェフの豚丼を手にながらはなしだす

「オビヒロいきたい、帯広行きたいね」

「帯広なんか、何もないぞ？函館より田舎だ、小麦と大豆畑しかないよ」

「豚丼タベタイネ」

「豚丼はセコマが一番うまいよ」

そう言ってジュハの分の豚丼も自分のカゴに入れてあげる

「ゴチソサマです」「いいんだよ」

カツゲン500ml2つ、ホットシェフの豚丼。おおきなおにぎりの鮭とたらこ、そして庶民の味方100円惣菜を数点購める

2千円弱。まあコンビニに買い物はこれくらいだ

もう二人に貸し借りはない。そういうオモロな関係になっている。

函館市電に揺られる。湯の川線はどっぐ前までの道のり。東京都函館市弁天町のワンルームアパート、風呂トイレ別ロフトつき。なんてことない港町だ。

「帯広行きたい、帯広いきたいね」

ジュハは車内で繰り返し返す

「帯広に何があるっていうんだよ」つつこむ

函館でいいだろ？函館にいれば何でも手に入るし。

「セナさんが宮近さん：モモさんに熱弁してたね。競馬オモシロって話シテタネ」

競馬かあ：ばんえい競馬かあ：ギャンブル中毒が語る競馬トークを聞かされる宮近は可愛そうだなあ

「函館だって競馬場あるじゃん」

「ちがうね、重りのあるソリひく、バンバはハクリヨクあるって熱弁してたネ」

ばんえい競馬の馬券って東京で買えるのか？

ここは函館なんかじゃない東京都函館市なだけだ：と自己暗示する。

「ワタシ、この街しか知らない。ニホン着てからこの街しか知らない」

ジュハは語る。残留カードも就労ビザも怪しい女であった。ここ東京しか知らないだろう

「ラッキーピエロおいしいね、カリフォルニアベイビーのシスコライスおいしいね。焼き鳥弁当何故か豚肉ネ。この街スキ」

「そうだよ、この街はステキで満ち溢れているんだよ」

わたしはこの街が好きだ。外人しかない朝市と寂れてシャッター街になった中心街五稜郭前駅を名乗ってはいけない市電の五稜郭前駅。（駅より五稜郭まで徒歩20分）そして観光客とカップルしかいない函館山からの風景。

これだけあれば、もう東京でいいだろう。

しかしこの女の知っている日本はこの街しかない。それもまた淋しい物がある。

函館どっぐ前、下車。徒歩数分でアパート着。鍵を開ける。郵便受けと一体となり造作された軽金属製のドアが開く。

「タダイマ」とジュハは挨拶する。誰もいないアパートなのに

「シャワーする？それともごはんサキする？」ジュハ

「飯だろ、豚丼冷めちゃうぞ」クロエ

手を覗ぎ。二人でテーブルにつく。セコマで買った弁当に貪る

大きなおにぎり二個は明らかに多すぎた。惣菜の小松菜サラダをつまみながら食べる「スープ飲む？」ケトルが湧いているジュハはカップスープ（白湯味）にお湯を注ぐ

「お茶にするかな」「ワカタネ」

ジュハはもう私の家の勝手が分かっていた。キッチンのカップボードの上段からごぼう茶のパックを手にかけていた

ジェネハピからジュハを預かりはじめて…もう随分と経つ。冬の出会いだったのにもう春だ残雪が消え、フキノトウが路傍で咲いている。嘘じゃない…本当に咲いている

喫茶を楽しみながらそっとるぶについてきた北海道地図をジュハに見せる

「いいか、これが北海道…いや東京都だ。面積で言うとお前のウリナラ（韓国）よりでかい」「デカイね、オドロキ」

「函館がここ、南の端だ、帯広は真ん中のちよい下だ。直線距離で500kmはある」

「やばいね、ソウルから釜山よりあるね」

「直線距離でこれだからな？特急で乗り継ぎでも∞時間はかかる。札幌で乗り継ぐのだが、函館から札幌まで行くのにそもそも時間かかるからな」

「電車フベン、クアン国と同じね」

「高速道路が繋がっているがの時間以上の超長距離運転になるよ？おまえできるか？」

「セナさんと交代で運転すればいけるね、セナさんメンキョもてるね」

「おまえ…セナと行くつもりなのかよ？」

「セナさんイキたがってる、使わない手はないね」

ジユハのいやらしさが垣間見えた気がする。

「女ゝ人旅行か…旅館に泊まるのはいいけど出張先の相部屋で揉めるんだぞ私たち？大丈夫か？」

「ワタシとクロエさん相部屋、セナさん一人部屋。これなら揉めない…いいね！」

オモロだ…こいつマジでオモロだ。

まあジユハとなら相部屋でもかまわない。というかセナがワタシを嫌がるだろうからな、合理的な韓国女だ

「6時間、ギャン中と車内で過ごすの大丈夫か？」

「BGM 競馬中継にすれば問題ないね、セナさんおとなしいね。宮近さん教えてくれた」

「逆にうるさそうなんだけど…」「これが一番丸い。マルクおさまるね、短波ラジオを

CARAUDIOのイヤホンじゃくくに「Nする。これで解決カイケツ」

セナがのたうち回る阿鼻叫喚をの時間…まあ運転席にいれば問題ないだろう。ジュハが運転するときは助手席に座ろう。

「たのしいね！いきたいね！帯広」

「ああ、マナカちゃんホテル詳しいから予約してみるわ。ばんえい競馬の季節にいいこうな」

「たのし！豚丼食べる！十勝川温泉入るの楽しみね！」

「十勝川温泉は音更町だからな、帯広じゃないぞ」

「インデアンカレータベルネ」

なんでこいつローカルフードに精通しているんだ。そういえば寮でずっとケンミンショー見てたって凡愚が行ってたな

凡愚とジュハは寮生活だった。外泊届を出せばジュハはこうしてワタシの家に外泊できるのだ。凡愚は保護観察を受けているのでまだ寮生活だ。

それはいい

「道央道と道東道はパーキングエリア死ぬほどすくないからな…有珠山で絶対給油だ…占冠で日高山脈をおがんで…」

「いいね、イイネ！旅行いいね！」

凡庸とした話題でも盛り上がるように鳴ってしまった自分が悲しい。今の自分はオモロじゃないけどジュハとこうして話しているとオモロになってしまう自分がいる。

「ゴチソサマね、シャワー入るネ？」

「おう、シャワーにしようか」

レッスンでベタベタの肌を二人、洗い流す。ワンルームのロフトにはジュハお泊り用の枕と布団がある

狭いがこれはこれでオモロだ

ギャンブル中毒と韓国人の帯広旅行…なかなかオモロになりそうだ。

※コンビニ「セイコーマート」は全国に展開中。

ハセガワストア叙景

「――ラッキープエロのチャイニーズチキンバーガー……カリフォルニアベイビーのシスコライ
ス……函太郎の回転寿司と日本酒五島軒のカレー……朝市のイカ刺し……カールレイモンのソーセー
ジ」

「何をイッテいるのですかクロエさん？」

ハセガワストアベイエリア店。隣接するはラッキープエロ末広町店。

この角だけで函館観光の5割は達成できる。

カウンター越しにわたしは注文票を書いている。もちろん焼き鳥弁当だ。

「ジュハもタレでいいよな」

「オマカセ、いいね」

ハセガワストアといえば店舗で焼いてくれる焼き鳥弁当が名物だ

なんてことはない、豚肉の焼き鳥が海苔弁の上にのっている、それだけの四級グルメだ。

四級故にそそのものがある。

今日はずいぶんと腹が減ったので、やきとり弁当の中を頼む。大サイズを買ってもいいが、まあ皮下脂肪と相談だ。

「ジュハ、お腹すいたか？」

「空いたね」「中サイズ食べれるか」「食べれるね」

ジュハもやきとり弁当の中にする。味はもちろん定番のタレ注文票を書いた後、レジのお姉さんに渡す。

すると目の前の焼き台で焼き鳥を焼いてくれるのだ。

出来たてホカホカの焼き鳥を食べられるのが、このハセガワストアの魅力だ。まあ四級グルメなのだが。

5分もしない内にやきとり弁当（タレ）が二つ運ばれてくる

ガラナもついでに購入。「1540円です」レジのおばちゃん、二千円で払う。

「ゴチン様です」ジュハはにこやかに焼き鳥弁当を受け取る。

見渡すとテーブル席がある。

「ここで食べるのですか？」ジュハ

「いや、ハセベンは家に帰って食べる。昔からそうになっている」

春風にしては寒すぎる函館のはまかげが冷える。二人いそいそと店を出る

「クロエサン、サツキうわ言：ナンダタネ？」

「ああ、あれか」わたしはあっけらかんに答える

「ジュハ、おまえもずいぶん東京：函館に毒されてきたな」

「わたし、ニホンは函館しか知らないネ、おいしいものいっぱいあるね、うれしいね」

「名物もわたしのおごりで散々食べただろう」

「クロエさんアリガトアリガト。感謝してるね」

ここで本題なんだよ。

「いろいろ食ってきたよなジュハ：ラッピのチャイニーズチキンバーガー、函太郎の回転寿司と日本酒。カールレイモンのソーセージ」

クロエの詠唱がはじまる。みな函館のご当地グルメだ

「ワカタ、ワカタから詠唱ヤメルネ、周りの人メセン痛いね」

「いいんだよ、他人の顔色伺うような人生送ってないんだから」

「ジュハはさあ…この焼き鳥弁当。函館グルメの中で何位くらいに入る？」

函館グルメランク付けがはじまった…

「みんなおいしい、回転すし函太郎の日本酒とてもおいしかった。全部一位でいい」

ジュハは成人しているので酒が飲める。他人のおごりで飲む酒はずいぶんとおいしいだろう

「全員一位はぬるい、そういう事いうから凡愚だって嗤われるんだぞジュハ。格付けしないとねえ…焼き鳥弁当が一位って事はないよな？」

「おいしいけど、一位じゃないね」

正直だった。ジュハのそういう所がオモロだ

「チープな味ね、けど好きネ。順位をつけるなら…」

「なら？」

「4位、いや7位がダトウ」

本当にそれでいいのか？ハナコと同じ問いかけをした

「チャイニーズチキンバーガー…シスコライス…カールレイモンのソーセージ…朝市のイカそうめん」

「わたしまだ食べてないグルメまだあるね。函館朝市いてない」

そういえばそうだったな、今度行こうな朝市

「わたし焼き鳥弁当のチープなのスキ。焼き鳥なのに豚入ってるの好感度モテルモテル」

「わかってきたじゃん…ハセストはチープなのがいいんだよ」

市電函館どっぐ前行き、最寄り駅は「函館どっぐ前」だが、運動の為、「末広町」で乗り付けて、クロエのアパートがある弁天町へ向かう。

「冷めちゃうね、よくないね」

「家でレンチンして食べる。それがいいんだよ」

車内で語る。

末広町で下車するつもりだったが。いつもの惰性でどっぐ前まで乗ってしまった。

少し建付けは悪いがリノベーションしてあるクロエのアパートへ鍵をかける

「タダイマカエリマシタ」

こいつ…まるで同居しているような口ぶりだ…オモロだ。

まあ実際半分同棲しているようなものなんだけどな。

「チンして食うべ」

と焼き鳥弁当を二つ、レンジでチン。500Wで2分

「ジュハはさあ…ネガハピの中で誰が一番なのかな？」

聞いてみる。ハナコと同じ感じで。——わたしに決まってるよな。お世話しているし

「クロエさん一番はナイネ。ㇿ番くらいね」

——なんでㇿ位なんだよ

「クロエさん。この間、三位が実質一位ってイテタネ」

「そうだけど…」

「それだとオモロじゃない四位くらいが一番オイシと思う」

「言ってくれるじゃん…けどおまえに飯を奢っているのわたしなんだけど？」

「一位っていったら…絶対オコルとおもったから、イワナカタ」

わかってんじゃない、安易に一位とか言うのは凡愚だ。こいつはちょっとオモロを理解しはじめているようだ

「冷めちまうよ、焼き鳥弁当食べよう」

ジュハは冷蔵庫から麦茶を取り出し、二つのコップに注いでいた。手慣れていた。同棲生活も長くなっていった。

「おいし、豚肉おいし！」

「ハセストはタレがうまいんだよ……わかるな」

「タレでも塩でも焼き鳥オイシイネ」

頬張るジュハの笑顔がみれた、うれしい。

オモロではない、純粋な悦びがわたしを襲う

——薩摩川タマのロフトベッドには敷布団が二組、そして枕がふたつある。

つまり、そういう関係になっている。秘密だぞ。たまに泊まりに来るだけだからな。

ジュハはセナに感化されて帯広に行きたいとねだってくる。

ジュハは国際免許をもっているから運転はできるらしい……

不安だからまずは近場からはじめようなジュハ

函館グルメ：まだ食べてない所があったら一緒に行こう

函館の良さを再確認するのも、アイドルのつとめだからな

ちよっとタレでベタベタになったジュハの唇の拭ってあげる。

そして唇と唇を重ね：重ねていいのか？まあするんだけど

東京都函館市弁天町は春風と共に過ぎていく

五稜郭の桜はまだ咲く様子がない。今度はお花見いこうなジュハ。

※ハセガワストアベイエリア店 北海道函館市末広町

トラピストクッキー叙景

「このビスケット、モサモサしてるネ」

「クッキーな、ビスケットじゃなくてクッキー」

「変わらない、全部小麦粉を焼いたお菓子。カワラナイ」

「ケーキとクッキーは同じ小麦と卵と牛乳と砂糖の塊じゃん。それは違うじゃん」

「それはチガウ」

——函館市弁天町は立派な東京都だ。と言い聞かせて私は此処に住んでいる。

海に目をやればはこだてドッグの灯り、港に目をやれば観光地たるベイエリアの赤レンガ倉庫のイルミネーションが煌々と照らす閑静な住宅地だ

ここは東京、ここは東京なんだよ。マナカちゃん。信じて、お願いだから。

弁天町ワンルーム、家賃㊦万円。風呂トイレ別、トイレは非水洗。

わたしとジュハは此処に住んでいる。

薄代々色がビビットな函館牛乳の紙パックを取り出す

ジュハのマイマグカップに白い乳を注ぐ

自分のマグカップにも注ぐ、紅茶の甘いポーションを入れる。

「ギューニウないと、口の中乾いて食べられないね」

「ああ、だから函館土産としては不評なんだよ」

「不評？オミアゲもたらふつうにうれしいね」

「日本には、お土産をもらっても喜ばれるものと喜ばれない物があるんだよ」

「ニホン人、ゼイタク」

「国民性だからねえ：あまり喜ばれない名物もあるんだよトラ○ストックッキーとバター飴は微妙なんだ」

そういつつも私は名指したバタークッキーを口に頬張る。

口腔内唾液をクッキーが一瞬で吸い上げていく。

渴きを求める喉にミルクティーを流し込む

——すっきりする。

この食べ方が一番オモロなのだ。函館市民しか知らないだろう
というか函館市民はこのクッキーを食べない。お土産だからだ。

札幌市民には銘菓「じゃがぼっくる」を食べない人間が多いそう

帯広市民が「三方六」を常に食べているわけではない。高いからな三方六。ご贈答用あ
ジギスカンを常食しない道民：いや東京都民もいる。

地物の名物〓地元の間が食べる訳では無い。

そしてこのクッキー。お土産には不評だ。

「函館土産ならいかせんべいが固い所」

「オイシカタね」カタコトの日本語が走る。

「マナカさん：佐伯サンにこのクッキーあげた？」

触れてほしくない所に触れてくるのがこの韓国女だ

マナカちゃんはやってない：まなかちゃんに手を出した男はゼツタイ許さない

けど、マナカちゃんはやってる女の子だ。認めるしか無い

「マナカちゃんはやってるからそんな安直な事はしない。ガチのおじにはそんな安直なことしない、チーズケーキのはず…」

「スナッフル？」

この韓国女子が函館に住み始めてもう3か月にもなる、歌もダンスも日本語は微妙であるが函館銘菓にだけはきっちり精通している。

すべて、私が餌付けした。理由はオモロだからだ。

「いや、そんなに安直は選択はしないスナッフルは札幌でも新千歳でも買えるから」

「おしえてホシね」

「プティ・メルヴィーユのチーズスフレ…たぶんデパ地下じゃなくて本店で買ってる」

「マナカさんエライね。」

「それがマナカちゃんの生存戦略だから…やってないマナカちゃんはやってない」

函館のデパートは丸井今井しかない。丸い舞にメルヴィーユのチーズスフレは売っていないけどプレゼントされた作曲以外の凡庸な男性にはそれがわからない

マナカちゃんの影の努力を無下にしてはいけない

マナカちゃんはやってない

マナカちゃんはやってない

そういう女子じゃない

ぜったいに違う

と願いながら今日もジュハと菓子を喫食する。

ワンルーム・ロフトベッドには二つの枕

楽しい生活だ。函館銘菓はまだまだあるからジュハと食べに行こう

次は五勝手屋羊羹な、江差だけど

オモロだ、凡庸な女子同棲生活であるが

この生活。非常にオモロだ。

東京都弁天町の日は今日も暮れていく。

※トラピスト修道院 函館空港より自動車で20分

五稜郭でお花見叙景

「サクラ、綺麗デスネ」「ああ、ようやく見頃だよ」

五稜郭公園のサクラは満開を迎え、軽く風に舞い散り始めている。桜が散るスピードは秒速のセンチメートルなんかじゃない。突風に煽られたらもっと早い。

「にしても、オシロでお花見。ジャパーニーズ「おはなみ」って不思議ネ。ここ本当におしろ？ Castle。」

五稜郭痕はもう城らしきものはないただの要塞跡だ。

「城といっても砲台みたいなもんだから、ニホンニホンした城がみたいなら松前城までいくんだな」

「それはチョットちがう」

東京都函館市は、今春を迎える

「…この中でホントに焼肉やる？ オカシイ？ オカシイヨ！？」ジュハ困惑している

「ああ、やる。やるんだ。函館市民はみなここでジンギスカンを焼く」

「サクラみながらラム肉焼く…おかしい、まちがてる…火事なるね」
ならないんだなあこれが。

ユンジュハ、はじめて道内で春を迎える
この女は、まだジンギスカンを知らない。

ことのはじまりはネガハピの楽屋であつた

「クロちゃん！クロちゃん！五稜郭でジンギスカンしようよ！桜も満開だし！」
藤丸ユウヒのとの突拍子のない意見からそれは始まった

東京都函館市は今桜の季節を迎える。

開花宣言から一週間で満開を迎える桜の季節は道民に短い春のぬくもりを教えてくれる

「いいかユウヒ？お前のプライベートに付き合うのはいいが？ちょっとジンギスカンはやばくないか？」

「なんでー！？」

アホ丸出したがどこか本能が見えない叫びが聞こえる。今日のユウヒはまともだ

「ネガティブハッピー女所帯の人でな、五稜郭公園で焼肉やってる姿はあまりにもイカつすぎる！アイドルが土手で焼肉なんてしちゃいけない！お掘りに灰を捨てる姿なんて見られてみい！アイドルとして終わり！おわり！」

そう常識に考えて、いい顔をした女の人衆がジングスカンやってたら。どう考えても絵面がおかしい

「灰はちゃんと持ち帰りなさいっておとうさんとおかあさんが言ってた！」

「お前の両親はちゃんと良心を持ち合わせているみたいだな」

アヤセが入ってきた。

「アヤセお前はいいかないだろ」

「花見や観楓会に興味はないが、女だけのジングスカンには興味がある」

こいつ…くるんか！？ネガハピメンバーとのプライベートをすべて蹴っているこの女が前向きになっっている。

「祖父母の趣味の山菜採りで行者ニンニクがしこたま余っている。知内まで行って取りに行くん

だから正気ではない、冷凍しても醤油漬けにしてもまだ余っている、わたしは腐らせない為の用途を探している」

「クマとか怖くないの？」「クマは逢う時には逢うものだ」アヤセ

「でも： Grillとか保冷ボックスとかどうするんだよ：の人で分担して持ってもかなりの量だし、イカツすぎないか？」

「マナカちゃんが出してくるって行ってた！」ユウヒの無邪気な声が聞こえる

——だめだ、ぜったいダメだ。

——マナカちゃん。マナカちゃんはダメ。ぜったい

「なんで！？マナカちゃんおクルマ運転上手だって」

「マナカちゃんの車をジנגスカンと行者ニンニクの香りで支配させちゃダメだろ！」

「そうかなあ！？」

「それはアウトだな、完全にオジの香りがする」

「オジって何！？」「また吐きたいのか？そういう話だ」「じゃあきくのやめる」ユウヒは素直

な子だ

「ユウヒィ…冷静に考えてみ？ マナカちゃんプリウスは仮にもアイドルが乗ってる車じゃん！？ 行者ニンニクはおじさんの香りだろ？」

軽く説教。

「たしかに田圃の香りがする女の車はヤバイな、男の香りと同じだ」アヤセ

「ユウヒお前がコンロ担げよ。体力には自信あるんだろ？」

「なんか荷物ねえ！ ヒカリちゃんが全部担いでくれるって行ってた、ガラガラに乗せたら大丈夫だって！ 火起こしも全部できるって！」

「凡愚か」「凡愚は賤けられているだろうな。先輩たちに」

私たちは知っている。糸井の胸には根性焼きの痕が数力所ある事を。そういう生活をしてきたのならジーンギスカンくらいよゆうだろ。

糸井はまあ…できるよな、ジーンギスカン。

「わたしも火起こしくらいできるけど？」

これは嘘じゃない。マジだ。北海道民なら誰でも木炭の火起こしくらいできる。

そこから始まったネガハピお花見回

話は盛り上がり、マナカちゃんはいエースをレンタルするらしい。知り合いの車らしい

はいエース運転できるマナカちゃんイカちい！糸井も無免許ながら運転できるらしい、別の意味でイカちい

こうして、ネガハピジェネハピ合同お花見回という名のジンギスカンBBQ回が発足したのであった。

宮近強制参加、そして食い意地と異文化交流にはガメつい韓国女が黙っている訳がなかった。

「今日はそのBBQの下見？」

「そう、下見下見。下見は重要だからな」

平日の昼だというのにジンギスカンの煙とドクドクの臭みがプンプン漂ってくる。

みな、酒を煽っている。これが函館の春だッ！

「わたし、クロエさんとしてお花見するだけで、十分ネ、満足ネ」

「お前、五稜郭はじめて？」一応聞いてみる

「函館きた日に一回イタ、まだ2月ダッタネ。Tower（五稜郭タワー）のノボタ。雪しかなかったね。無駄足ダタネ」

「じゃあお花見ははじめてかあ」

「ニホンのサクラみるのこれが初めて、スゴクうれし」

舞い散る桜吹雪中をジュハと歩く。

ジュハの黒髪に薄紅色の桜が舞う。

5センチメートル桜が落ちるスピードは秒速5センチメートルかもしれない。

どこか別れの匂いがするデート映画をふと思い出した

それだけ映える風景だった。写真集にすれば売れるだろう

しかし、写真には取らない。自分の網膜に焼くのである。

「にしても五稜郭歩くね、路面電車の駅から五稜郭までメチャ歩く」

「ああ、詐欺だからな市電の『五稜郭前』は、平気で20分は歩かせる。函館線（列車）の『五

稜郭前」も詐欺だぞ、もっと歩かされる」

「この街、オカシな事おおすぎ。絶対トキョじゃない、ここ絶対ハコダテ」

「ここは東京だよジュハ、そうなんだ。ここは東京に違いない……」

自分に言い聞かせるように私は何度も頷いた。

「クロエさん、が言うならここ東京ね。わたしにとってはハコダテとかトキョとかドウデモイイ」

「お前はいい奴だよ」

桜とマトンくさい煙の中、ジュハの肩を抱き寄せる。公共の場だからキスはしないけど、額と額をくつつける。キスのような高揚感がモテル。

「わたしいい人ね、クロエさんもいい人ね」

「帰りにラッピかあじさい食べるか、あじさい本店あるぞ五稜郭」

「ラッピがいい、ガラナ飲みたいね」

「お前も函館をわかってきたな」

「ラッピおいしね、今度焼きそばタベタイネ」

連休前、外国人観光客がまばらな函館の街を二人あるく

行楽シーズンのみ賑わうこの観光都市にワタシとジュハは生きている
ジーンギスカン、たのしみで仕方がない。

これからも函館のオモロスポットをこの女に教えないといけない
オモロを共有するんだ。

後半へ続く。

※函館五稜郭公園 市電「五稜郭公園前」下車徒歩20分

お花見、そして微熱を重ねる。

「クロエさん」

「なんだよ」

「ワタシ…ウレシイ」

五稜郭公園は今、葉桜の季節を迎えようとしている。ここ東京都のお掘り、五稜郭は五星の形をしている。実質皇居だ皇居

「コウシテ、クロエさんとオサンポできる。それだけでウレシ」

「当たり前だろ？ 歩くフランス人形と一緒に歩ける事を、光栄に思えよな」

「フレンチニンギョが街をアルイてたら、ソレはぜったいにコワイ」

「まあ、それはそうだけど」

この韓国女、ついにツツコミを覚えはじめた。日本に染まり始めている。

ジュハ来日からωか月が経過。滞在カード更新完了。就労ビザは宗教法人ネガティブハッピーが交渉中

「研究生」が就業に当たるかどうかがミソ……らしい。

「サクラ散るの。はやい。タツタ二週間ダケ」

「五稜郭のサクラは早いんだよ」ここは東京だ、何度でも言う。

「ホカイドウの春、短い。もう夏来る」

「ここは東京だよ」何度でも言い続ける。

「羊肉のヤキニク、おいしかたね」

「ジンギスカンな」

「またやりたい」「やろうな」

藤丸ユウヒ提案によるネガティヴハッピー女子陣による『お花見ジンギスカン』が執り行われたのは連休前の平日であった。

五稜郭公園の桜と言えば、ジンギスカンだからな。

当初はGWを予定していたが。散るスピードが早いので急遽繰り上げた。

ハナコが用意した羽幌島産のオロロンの風に吹かれて育てて希少な道産羊肉は、いままで食べた羊肉の中が本当に羊の肉なのかどうか不安になる程おいしかった

独特の臭みがない羊というだけで、もうこれは別の動物の肉なのでは？と疑った。きっとマナカちゃんは食べ慣れているだろうな。ススキノで。

道民のジンギスカンは国産羊じゃやらない。外国産の肉を日本のタレでつけた「味付け肉」が主流。運河亭とかな

最悪冷凍のロール肉だ。それはそれであいじわいぶかい。

——そしてアヤセの祖父母からの差し入れである大量の行者ニンニク

そう、行者ニンニクであつた。道民ジンギスカンには欠かせないものであつた。

桜は満開を迎え散り始めていた。桜吹雪が最強に顔がいい美少女達に降り注ぐ。完全に画（え）になっている。

マナカちゃんが運転するハイエース（おじさんから借りたらしい）でBBQセットを運び、火起こしに妙になっている凡愚（糸井）とワタシが炭を起こし。

それはもう宴であった。成人しているメンバーは酒まで飲んでいた。泥酔した凡愚（糸井）は輩（やから）、そのものであった。宮近が介抱していた。

ハナコってお酒の飲み方も上品なんだな。缶ビールをちゃんとグラスに注いで飲んでいた。アヤセって酔っ払うと黙るんだな、かわいい。

問題はこの花見と称するジンギスカンパーティ。今をときめくアイドルグループの女子によって執り行われていた。

完全にイカツイ風景であった。女子がやっていいジンギスカンではなかった。

「ありえないほど行者ニンニクさすぎるッ！」

宮近が絶叫していた。

「アイドルがやっていい事じゃない」

宮近が引いていた。いいか？これがネガティブハッピーだ宮近。

ジュハはパクパク肉を食っていた。

「クアン国（韓国）のヤキニクと別物。これ完全に焼いてない。肉を煮てるね、オイシ」

ジュハ。酒には手を出さなかった、この時知ったがネガハピ女子陣で最年長はジュハであった

「お酒ニガテ、ヤラカシタクナイ」

「チャミスルしないのー？」ユウヒ

「カンコクジン、ミナお酒ツヨイ、ワケデハナイ」

「オサケのむのメドクサイ」

ジュハらしい生存戦略であった。

問題は宴の後であった。

炭と肉、そして行者大蒜の匂いをまとった現役アイドルたる女が二人。市電に乗り。「五稜郭公園前」から「函館どっぐ前」へ下車

弁天町の我が家で気がついた。この匂い、アイドルがしている匂いじゃない事に。

行者ニンニクの匂いは数日残る。アヤセの祖父母が撮ってきたのは知内町（檜山管内）の天然のドギツイ奴であった

そして、体中から何かが漲ってくる。ニンニクパワーだ。身体の芯から熱いものがたぎるのを感じ始めたのは

たのしいお花見という興奮と夢の世界から醒めた。醒めたのは自室の玄関の乾いた扉を開けた時であった。傍らにはもちろんジュハ。

「タノシイ！タノシイネ！」

ジュハ上機嫌であった。ジンギスカンはローカロリーハイプロテイン（蛋白）だからいくらでも食べてもいいというのがジュハ流ダイエツト術

そんなワタシはと言うと——ムラムラしていた。

冷蔵庫にハラれたゴミ収集スケジュールの紙。やる気のない函館市下水道水洗化助成金のチラシ（当然非水洗）がわたしをせせら笑う。

子宮が疼いているのだ。脳みそで考えてない。女性器が何かを訴えてくる。

「ジュハ：一回落ち着こう！なっ」

リビングの電気を付け、おもむろに冷蔵庫を開けピッチャーを取り出す。コップに一杯、注ぎ。そして一気に飲み干す。

「ワタシ、オチツイテル。クロエさんオカシいネ？」

ジュハは戸惑っていた。わたしが何を言っているのか理解できていない。

「一回、一回抱き合おう。抱き合うだけ……な」

「ハグするの？ いいね！」

ジュハは気軽にわたしの身体を抱いた。友情のハグであつた

——もうどうなつてもいいや。

先輩らしい。キツイ抱擁で返した。

「クロエ……さん、いいね」「ジュハ……ジュハッ！」

その後、わたしとジュハは何度も額を重ね、そして抱き合った。

おでことおでこが熱病を患ったかのようにやられている。その熱をさらに高め合う。

顔が最強にいいアイドルと顔と身体と正確が最強にいいスロロアイドルが今、媾（まぐ）わう。神様は何も禁止なんかしていない。

——ジュハはすべてを知っていた。

愛し方。接し方。そして女としての生き方だ。

——これは違うんだマナカちゃん。聞いてマナカちゃん

これは友情。女々による友情なの。ごっこ遊びにすぎないの！飯事（ままごと）遊びなのッ！
おねがいマナカちゃん聞いて！

「——マチガイ、だれでもある。クロエさんオカシクない」

ジュハの手がわたしの頬をん撫でる。そのまま金髪のつむじを包み込む。

ジュハだけがわたしを赦（ゆる）してくれた。

これは行者ニンニクのせいなんだ

そう行者ニンニクのせい

すべてはそう、夏のせい

「ジュハ…」

リビングの固い床で眠るジュハに語りかける。

「今度、函館山連れて行ってやる。夜景見るぞ」

「ウレシイね」

「この街が誇る。100万ドルの夜景だ、覚悟しとけよ。展望台のレストランで飯食うぞ」

「楽しみタノシミ」

「そのかわり、アイドル：マジでがんばれよ。死ぬ気で歌って踊れ。わたしとお前は一生この函館で暮らすんだ」

「それはメドクサイ…」

いつものセリフだ。その杜撰な根性がわたしはだいすきだ。情性で乗り込んできたこの美貌にヤラれてしまった

しかし、アイドルは頑張らないといけない。一発軽く背中をひっぱりたい

「…夜景見れるならヤブサカではない」

ジュハからはじめて、『やる気』の言葉が聞こえた

それだけで価値のある、一夜だったと思う。

ニンニクくさいから、口吻はしない――

おまけ、手弁当叙景

ウェダーインゼリーのみで腹を満たしているアヤセが眼下にいる。昼時の宗教法人ハッピーハツピイ

私は手弁当を開く。

「弁当か、ずいぶんと自分造りに熱心なんだな」

「私が作った理由じゃないけど」

弁当箱を開ける。ごま油の香りが楽屋じゅうに広がる

「おまえが作ったわけじゃなさそうだな」

「ああジュハが作ってくれる…私さあ、いつもアイツに飯奢っているじゃん」

ジュハと私の関係は公然の秘密となっていた。寮暮らしのジュハが夜な夜な私の家へ遊びにきて、一晚を過ごすことは公然の秘密であった

「英韓交流とは微笑ましい事だな、外人コンプレックスはどうした？自分のキャラを見失ったのか？」

「それは言うなよ、紳士協定とかあるだろ。」

私とジュハのファーストコンタクトについて、触れてほしくない。

一応イギリス人ですから、そうだ私はイギリス人だ、そうなんだ。

弁当箱にはごま油を帯びた海苔巻とナムルが鎮座してる。コリアンが広がっている

「気合入ってますね」隣にいたマナカちゃんがびっくりしてる

「随分とステキなお嫁さんゲットしたようだな、やはり持つべき物は舍弟だな」

「やめろよ、そういうんじゃない。飯奢ってるだけ、これはお返し」

「餌付けしてますね」「そうだな」アヤセとマナカちゃんが続く。

「そうじゃない、餌付けとかじゃない。餌付けだけど餌付けじゃあない」

「素直に喜ばいいんじゃないですか」マナカちゃん

「マナカちゃん、これは本当に違うの。オモロのためなの！」

「餌付けの見返りが愛妻弁当ならいいじゃないか、後輩をはべらかす趣味もまあ凡庸だがいいんじゃないか？」

「後輩のかわいがりくらい許してほしい……」弱々と私は答える

「それにさ、あの韓国女オモロだからまあ見ててよ」

クロエは隣でワイワイ騒いでいるジェネハピの面々へ顔を出す、宮近の顔が一瞬凍る。

「ジュハ、アヤセとマナカちゃんがお呼びだ。今日はネガハピの面子で一緒に昼飯食うぞ」

ジュハとの会話も大分慣れてきた、慣れている自分が怖い

「ソウイウノチガウ、ワタシ宮近サントヒカリサントタベル。」

——そうだ！この感じだよ！たまらねえ！

「あなたとの恋愛関係、privateだね。ハハBusinessする所、だから研究生のみんなと食事するネ」

「アナタハ、ワタシノツクタお弁当タベル。研究生とワタシお弁当タベル」

「クロエさんとわたし、Businessではあまりベタベタしない。それがいい関係ね！」

この距離感、この感覚。好きにならずにいられない！

「すごいな、おまえの舍弟」アヤセが軽く引いている

「だろ？私のだかな！譲らねえぞ私のオモロ」

「いいお嫁さんですね」マナカちゃん、違うんだよこれはオモロだ、およめさんじゃない。

そういいつつ弁当をつまむ。辛くはないがコリアンの味がする

レンジでチンしたビビンパめいた韓国風海苔巻。微妙な韓国料理屋に来了感覚。まずくはない。

——普通。

今度、日本の弁当ってヤツを教えてやらないとな

まずは卵焼ぎとタコさんウィンナーからだな。

最初は敬遠したがこのオモロ女。絶対手放す理由にはいかない。

※宗教法人ハッピーハッピー 函館市のどこにある。

あとがき

御手にとっていたいただいた皆様、はじめまして。メカペニと申します。函館に想いを馳せたらこうなりました。タマジュハ、いいよね。今後のネガティブハッピーに期待です。

この本がタマジュハの布教に微力になれば幸いです。

奥付

誌名「東京都函館市叙景 タマジュハ函館短編集」

発行日 5月5日 発行者 著者 メカペニ

ご意見・感想はこちらまで <https://twitter.com/mekapeni>